

汝窯青瓷

左京区 田中 誠孝

汝窯（じょよう）とは宋代「五大名窯」のうちのひとつで、他は官窯・哥窯・定窯・鈞窯である。その窯が中国のどこにあったかは議論があった。臨汝（りんじょ）県嚴和店、軋花溝（あつかこう）、下任村、桃山溝、陳家庄、崗溝（こうこう）、陳溝、黄窯、石板河に広く分布している古窯址、いわゆる地方青磁の窯で北宋前期に開窯したと推測され、北宋末から金代に秀作を造ったと言われる。いま一つは北宋官窯（汝窯の後に首都の城内に作られたとされる北宋期の官窯）のひとつで、汝官窯あるいは汝窯とよぶ。南宋の周輝が「清波雜志」のなかで、「汝州は宮中の禁焼なり」と述べていることに

より、宮中に官窯があったと考え、失透性の一群の青磁を汝官窯とよぶとする流れである。清波というのは浙江省杭州の城門の名であるようで、『四庫全書提要（清朝の乾隆帝の奉勅撰）』によれば、周輝は清波門の傍に住んでいたので『清波雜志』と名付けたと言われている。

いずれにしても汝窯青瓷（じょようせいじ）は、北宋（960年～1127年）の時代に官窯（朝廷の直轄窯）に指定された窯で焼かれた、皇帝の使用する器である。その色は「雨過天青」（雨上がりの水分を含んだ空の色）で天青とか粉青とか呼ばれていた。後周の皇帝・柴世宗が、「雨過天青雲破処、諸將顔色作將來」と命じて青磁を柴窯（さいよう）で焼かせたものが最初であるとされる。

中国では瓷器（じき）と呼ばれるものが、日本では磁器と表現され、土物すなわち粘土で焼いた磁器を瓷器と呼んでいる。磁器の粘土は陶石を粉にしたものであり、磁器土と呼ばれる。

汝窯の特徴は1.天青色の釉色 2.極めて小さな支焼技術 3.釉面に表れる水裂文の貫入であり、中には貫入が全く無いものもあるという。貫入が無いということは胎土と釉薬が同じように収縮しなければならず、非常に難しく一般的には不可能に近い。

支焼とは全ての面に釉薬を施した器を支える細い支台で陶器または磁器や金属

で出来ている。日本ではハリ目といい、その跡をハリ目跡、ハリ支え跡という。従って焼成後はそのハリ目の跡が器の裏にみられ、磁器の変形を防ぐと同時に、釉薬を器全体に行き渡らせる目的がある。その数は器の大きさによって3本、5本、6本の釘が使われた。

小山富士夫は「骨董百話・昭和53年刊」で「汝官窯は遺品の極めて少ないもので、世界にざっと60点ぐらいしかないものである。イギリス東洋陶磁協会会長のゴンパーツさんは世界中にある汝官窯をくわしく調べ、著書「中国の青磁」に、汝官窯はロンドンのデヴィット・ファウンデーションに15点、大英博物館に3点、この他、欧米に12点、計30点あるだけだと発表している。「この他」北京の故宮博物院と台北の故宮博物院にざっと30点ぐらゐり、台湾の国立故宮中央博物院からだしている「故宮藏瓷」の汝官窯編には23点登録されている。」としている。この時期から年月を経て世界的な調査の結果、現在は世界に71点ほどしか残っていないと言



汝窯青瓷無紋水仙盆

われない。北宋汝窯青磁蓮花式碗、北宋汝窯青磁無紋水仙盆等はその代表格である

が、日本では大阪の東洋陶磁美術館にある「汝窯青瓷水仙盆」が有名で、国内ではこれを含めて3点ほどしか無い。



自作の汝窯青瓷唵籠

このように世界的にみても数が少なく、その色は「雨過天晴」の如くと言われる滋味豊かな汝窯青瓷に魅力を感じ、作陶してみることにした。幾つか造ってみたが、そのうちの一つが程々の出来だったので第67回新匠工芸会公募展に出品したところ、たまたま入選したのが「汝窯青瓷唵籠」である。公募展に来ていただいた年代物の磁器に詳しい知人から北宋（960年～1127年）の汝窯青瓷の破片を頂いた、自分の持っている破片を半分に分けたものだという、貴重なものなので恐縮している。900年間も土に埋まっていたので当時の色かどうか分からないが緑色の深い色合いで、断面を見ると釉薬の掛かり方（厚さ）が意外に薄いのに驚いた。伝世品の釉色と出土品の釉色がかなり違っていることは知られており、出土した天青釉と呼ばれる陶片の60%は月白色、25%が淡青色、天青色と呼ばれるものは15%のみであると報告されているとある。

（宝豊清涼寺汝窯址報告書）